

がく どう しゅう だん そ かい
学童の集団疎開稲城市東長沼2111
☎042-378-2111
発行 2006. 2. 20

威光寺の景色（山中国民学校6年杉田英子画）

戦争が激化して、東京をはじめとする大都市での犠牲者が増えてくると、政府は都市居住者の疎開を促進するようになります。昭和19（1944）年6月には「学童疎開促進要綱」が閣議決定され、国民学校（現小学校）の学童の疎開が早急に実施されることとなりました。東京都では学童の保護者の申請を受けて3年生から6年生までの学童が親元を離れて集団疎開することになりました。疎開先は、東京都郡部をはじめとして、神奈川県を除く関東諸県と山梨・長野・新潟・福島などの諸県と決まり、南・西多摩両郡には品川区の学童約8500名、北多摩郡には赤坂区の学童約1500名が割り当てられました。

稲城村には、品川区大井の山中国民学校の学童219名が疎開してきました。山中国民学校の疎开学童は全体で310名であり、うち91名が多摩村（現多摩市）の吉祥院・大福寺・高蔵院の三寺院を、残り219名が稲城村の六寺院を学寮とすることになりました。学年別に見ると、坂浜の高勝寺と宝蔵院は3・6年の男子、百村の妙見寺と東長沼の常楽寺は3・6年の女子、矢野口の妙覚寺と威光寺は4年の女子でした。各寺院の児童数は高勝寺60名、宝蔵院39名、妙見寺38名、常楽寺43名、妙覚寺19名、威光寺20名でした。各寺院の学寮には、1名～2名の教員と寮母が付き添う形になっていました。

山中国民学校の学童は、昭和19年8月14日に稲城村に到着しました。稲城第一国民学校（現稲城第一小学校）の『学校日誌』には、疎开学童到着の様子を次のように記しています。

八月十四日 山中国民学校疎開児童入校。午後四時青渭神社前ニテ入村歓迎式挙行。午後六時交流会開催。

